

いちご新品種「スカイベリー」の品質向上技術の確立

要約

花房当たり 5 果残しの摘果を、2 番花摘花（果）方式（供試区）とすそ玉摘花（果）方式（対照区）で比較した。

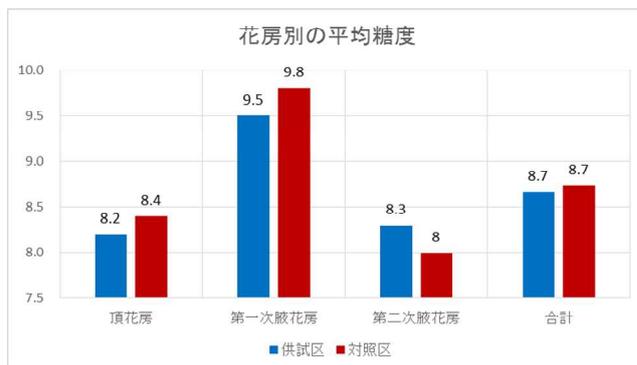
生育は全期間を通して大きな差は認められなかったが、1月中旬からハダニ類が増えたことから地上部が萎縮（矮化）したため、第二次腋果房では果重に肥大する傾向は認められたが糖度は低い傾向で推移した。

供試区の果重は対照区より肥大する傾向がおおむね認められたが、両区の収穫量に差は認められなかった。糖度は8.2～9.5度であったが、全体の食味や品質に大きな問題はなかった。したがって、摘花（果）方法の優位性は判然としなかった。

○ 展示のねらい

「スカイベリー」の生産者数、栽培面積は年々拡大するものの、個人や時期により食味のばらつきが課題である。近年導入され始めた摘花（果）が食味向上対策の一つとして具体的成果を上げつつある。そこで2番果摘花（果）方式とすそ玉摘花（果）を比較し、食味・品質に及ぼす効果を確認する。

○ 主な成果



1 果重の推移において供試区では、頂花房、第二次腋花房で対照区よりも果実が肥大する傾向であった。なお、両花房を合計した株当たり収穫量については、第1次腋果房で供試区が対照区の93%と減少したが、3果房の合計では供試区が対照区に比べ101%となり、大きな差は認められなかった。

供試区における果実別の糖度は、頂花房及び第二次腋花房で9度より低い値で推移し、第一次腋花房では安定して9度以上の値を推移した。摘花（果）の手法による糖度の目立った差異は認められなかった。食味については、糖度の測定値の高低にかかわらず全体として良かった。しかし、3月以降の第二次腋花房では次第に糖度及び食味は個体のばらつきが大きくなった。

品質については、両区とも2月に入って先づまり果が散見されるようになった以外は、果形、着色に問題はなかった。

○ 今後の方向性

担当農家は摘花（果）の効果を実感しているが、2番果の摘花（果）は作業時間が増加する上に、大玉のロスにつながり、糖度の差も判然としていないため、現状の方法では労力や販売方針に合わないとの意見があった。したがって、4粒残しによる摘果試験の実施と現場に適應した摘花（果）の手法や時期を検討する。

実施機関：芳賀農業振興事務所経営普及部 実施場所：真岡市

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315